

[巻頭言]

「情報システム学」と実践

伊藤 重隆

情報システム学会 名誉会員

■はじめに

時が過ぎるのは早いもので、3月になりました。季節の花である紅梅、白梅が満開を迎え観梅の季節になりました。また、桜も早い時期に咲く河津桜は満開となり大いに生きる喜びを与えてくれます。また、吉野山をはじめ全国各所でこれから観桜ができますのは、世界的に見て日本人が誇るものと思います。自然を大切に作る習慣が昔から大事にされ引き継がれて来た証拠とも考えています。

一方、国際情勢は極めて緊迫して人々の生活に実際に影響を与えています。一刻も早く平和になることを望んでいます。

また、コロナ、オミクロンの感染症はやや感染が抑制的になって来ましたが、未だ収束はしておらず心配が引き続きます。感染症については、その対策について西洋で有名な哲学者カントは天然痘が欧州で蔓延した時に感染症対策を提言しています。また、数学者、哲学者である高名なライプニッツもペストが欧州一円で広がり多くの死者が出ている状況で、一刻も早くペストを収束させるための対策を緊急提言しています。やはり常に問題意識を持ち人々のために役立つ気持ちを持った人々であることを再認識しました。無論、現代とは感染症の情報の正確性、伝達速度、情報収集量が不十分で、且つ感染症医療研究の水準はかなり初期段階であったので提言が実行されることは残念ながら無かった様です。

人間に取り昔から病気は大敵で健康に一生を送ることが望ましい環境であったと言えます。当学会で過去に「富山の薬売り」の論文が提出され江戸時代において一人一人の命を守る仕組みが広範囲に存在したことが発表され情報システムについて貴重な研究がされていたことが印象に残っています。江戸時代なので社会には有用な情報を活用した仕組みが無く西洋にのみあったと認識するのは大いに誤りであると思います。例えば、江戸時代に大坂の米相場は、世界でもいち早く日本で市場が成立したと言えます。米相場に関係した人々は各地に居て情報を活用して商売を成立させていたそうです。また、米のみでなく各地の商品の販売のために北前舟と呼ばれる全国を運行し各地の経済を活発化させた海運業も大いに発達していました。また、飛脚と言う高速に情報を伝達する仕組みも設けられていました。

■江戸時代から見る地域振興小考

江戸時代のことは古すぎて何も参考にできないとの印象を持つでしょうが、実際には経済システムを中心として、また、同時にそれを支える情報システムの組み立てがあったことが歴史的な事実として残っています。現在の日本では課題となっている地域振興について、デジタル技術を使いスマート・シティの基盤整備を実施し住み易い快適な地域とする政策と実践が各地で実施されています。

地域振興の点から江戸時代を振り返りますと、日本は多くの藩に分割され多額の税金が徳川幕府から各藩に要求されていました。その対応のため各藩は各藩の土地と知恵を活かした農業及び商業のあり方を武家のみでは全く検討するのが困難であるので当時の有識者と十分に検討し政策立案し実行しました。当時の日本は、明治時代以降には集権体制となったのは異なり分権体制で、当然分権経済体制ですが、各地域の経済を如何に成長させるかについて各藩で倫理の観点も取り入れ自由に討論した結果、信頼社会を実現する方向で改革に取り組んでいます。また、各藩の分権経済体制が全国に横につながる仕組み（情報を収集し情報交換し有効利用できる情報システム）が暗黙に認められていましたので、先ほど述べた米相場取引所、海運業も経済的に大いに発展した様です。この時代に各藩から知恵を出すことを求められた有識者と言われた人々は、私の知る限りでは海保青陵（経世家）、山縣蟠桃（商人、実学思想家）、石田梅岩（思想家、倫理学者）、三浦梅園（科学哲学者）等の高名な方々が挙げられます。他にも多くの有意な人たちがいた模様です。各地域に商業を中心として信頼社会が成り立ち経済発展したことが日本の将来に取り重要なヒントになると思います。

■これからの社会と情報システム

先日、1月30日（日）に放送大学 生涯支援学習番組「AIプロデューサー ～人とAIの連携～」第一回「AIプロデューサー」にゲスト対談の1人として出演しました。対談は講師である当学会名誉会長でもある慶応大学理工学部山口教授と行いました。視聴になった方もおいでになるかも知れませんが、対談時に当学会が提言し今後出版を予定している情報システム学で記述している事

項について説明する機会を頂きました。今後 AI の活用範囲が広くなり社会に取り有益であると思いました。また、その際には情報システム学を実践する情報システムプロデューサを始め情報システム実務者が AI, ロボット等も含めた総合的な情報システムを社会のために構築・運用する場面が多くなると考えました。その実現には当然ですが、文理を越えた「情報システム学」を理解し実践する人々が重要になります。その人々を支える良い社会環境が必須で支障となる慣習は打破して進む必要があります。上記対談時に少々、その点について述べました。日本では情報システムはコストと捉える傾向が未だ多く戦略的な位置づけにしない企業が見られると申し上げました。米国においては全く正反対で特に大企業において経営者は情報システムの重要性を良く認識し経営戦略の重点に置き、その実現のために人的資源を始めとして経営資源を重点投入しています。その思考・実行力の差が各産業での実績に示されています。

日本では、「モノ」から「コト」へと科学の見方が大きく変わり産業界もかなり変革する必要があると聞いたことを記憶しています。その実践には、サイバーフィジカルシステムの考え方と事象の抽象化と概念化が重要になると思いました。ま

さに、全産業で仮想空間上の情報システムを活用して各種事業を空間上で試験し、その結果をフィジカルシステムに反映させる様に情報空間と実空間を一体化にした取組によりイノベーション実現への道があると思いました。また、同時に考えましたのは、日本では過去に「Japan as No1」と言う成功体験があるので上記概念の導入と利用を実現する支障となり産業界の発展が遅れたのではと心配しました。今後、益々人の存在を意識した社会システム構築に有用な情報システムが各分野で適切に構築・運用されることが大切と考えています。そのためには情報システム学の研究（理論・実践）が各学問分野と幅広く交流し学として発展・普及し実践されることで社会貢献につながれば良いと思っています。

著者略歴

伊藤 重隆（いとう しげたか）

元情報システム学会会長、富士銀行入行（現みずほ銀行）システム開発担当、米国富士銀行信託上級副社長（システム担当）、みずほ情報総研（現みずほリサーチ&テクノロジーズ社）品質管理担当。現在、情報システム学会新情報システム学体系調査研究委員長を担当。